

2011年8月9日

ロシア関連メモ 078

国際公共政策研究センター
主任研究員 神野 雅人

ロシア 2012 年問題関連(4):有識者の情勢分析

ロシアの 2012 年問題については、既報の通りメドベージェフ大統領、プーチン首相のいずれも来年 3 月の大統領選への出馬表明を留保した状態が続いており、最終的に決定されるのは今年 12 月の議会選挙の後になるとの観測も浮上している。

メドベージェフ大統領はスokolovで開催した大規模な記者会見において、周囲の期待を裏切る形で出馬表明を行わなかったが、その一方で、プーチン首相は「全ロシア国民戦線」結成や「戦略的イニシアティブ・エージェンシー」設立など着々と基盤固めに動いている。このような情勢を背景に、ロシア政治・外交専門家の間には、メドベージェフ大統領が再選されて権力を一手に握って大胆な改革に着手するというシナリオはもはや遠のいたとの見方が強まっているようだ。さらに、次期大統領にメドベージェフ氏、プーチン氏、あるいはそれ以外の第 3 者が選出されても、結局のロシアが大きく変わることはないだろうという悲観的な雰囲気も感じられるようになってきた。以下、最近の論評の中から興味深いものを紹介する。

1. ウラジミール・フロロフ『メドベージェフは 2012 年の競争に敗れた』

Vladimir Frolov "Medvedev has lost his 2012 bid" Moscow Times 1/8/2011

(1)解説

ウラジミール・フロロフ氏は LEFF グループ代表。国立外交政策研究所理事、国家院外交問題委員会副委員長、大統領府外交局副局長等を歴任した外交専門家。

大統領選について、同氏は、「全ロシア国民戦線」結成はプーチン氏が 2012 年以降も実権を握り続ける意図の明白なサインであり、12 月と予想されているメドベージェフ氏の出馬表明も行われることはなく、今のタンデムの枠組みが維持されたまま選挙を迎え、プーチン氏が大統領に復帰することを示唆している。

また、同氏はメドベージェフ大統領のアドバイザー的立場にある現代発展研究所に対し非常に厳しい立場を取っており、現代発展研究所のラディカルな改革案はロシアに混乱をもたらし、国家解体につながりかねないものであるとして批判している。そして、その「過激な」提案から距

離を置かなかつたことがメドベージェフ氏の失敗の要因であり、メドベージェフ氏はもはやプーチン氏の信頼を失つたと見ている。

9月に現代発展研究所が主催者の1つとなつてヤロスラヴリで開催される「グローバル政策フォーラム」において、メドベージェフ氏に出馬宣言を行わせ、プーチン氏との対決姿勢を鮮明にさせようというメドベージェフ陣営の戦略が実行されたとしても、プーチン氏はその挑発に乗ることはなく、さらにメドベージェフ氏が大統領権限でプーチン首相を解任するという最後の手段に出る可能性についても、それを否定する賢明さをメドベージェフ氏は持ち合わせている筈だとして否定している。

(2)要旨

今年の前半まではタンデムのどちらが大統領選に出馬するかが不明確なことが、諸外国にロシア国家の方向性が不確かであるとの印象を与え、それがロシアの政治的安定と長期的発展の阻害要因になっていると考えられていた。だが、今となつてはメドベージェフ氏とプーチン氏にとっての最良のシナリオは、現在のタンデムの枠組みを変更しないことであり、そのことをすぐに発表することであろう。それ以外のオプション、すなわち、プーチン氏の大統領復帰またはメドベージェフ氏が、プーチン氏が指名した第3の候補によって大統領の職を追われるといったオプションは理論的には可能性であるが、存在現状維持シナリオに比べてはるかに可能性が低く、またロシアにとっての有効性も低い。

西側諸国の多くは今年12月にメドベージェフ氏の大統領選挙の立候補表明が行われると考えているが、それは実際には行われまいだろう。その可能性は、今年5月にプーチン氏が「全ロシア国民戦線」結成を発表したときに実質的に無くなったといつてよい。「全ロシア国民戦線」は明らかにプーチン氏が2012年にクレムリンに復帰することを正当化し、確実にするための政治的土台を築く動きである。

メドベージェフ大統領のリベラル派のアドバイザー達は、彼の2期目大統領任期を実現しようとして、メドベージェフ氏の近代化プログラムはプーチン流の否定であり、プーチン氏の「管理された民主主義」からの変革であると主張している。そして、さらにプーチン氏が唱える「安定」は「停滞」であると言ひ換えている¹。だが、リベラル派アドバイザー達のこのような主張は、もしメドベージェフ氏が大統領に再選されたならば、国民の十分な支持がないまま急速な政治的自由化を進め、それによってクレムリンがコントロールを失ひ、ミハエル・ゴルバチェフが行つた

¹ ここでいう「リベラル派のアドバイザー達」とは以下にあるとおり現代発展研究所(Институт современного развития : Institute of contemporary development : INSOR)を指す。INSORのイーゴリ・ユルゲンス所長とエフゲニー・ゴントマヘル理事が連名でVodemositi(2011年7月27日掲載)に投稿した論文『メドベージェフよ、今こそソルビコンを渡れ』(《Медведеву пора перейти Рубикон》)の中に、「タンデム的一方(プーチン首相)が主張する「安定」は停滞と同義であるという内容の記述がある。詳細はロシア関連メモ No.77「ロシア2012年問題(3)『メドベージェフよ、今こそソルビコンを渡れ』参照(http://www.cipps.org/group/russia_memo/077_110805.pdf)。

ような国家の解体につながるのではないかという不安を高めることにつながっている。

メドベージェフ氏の過ちの1つは、彼のアドバイザー達、特に現代発展研究所のラディカルな提案²から距離を置かなかったことである。現代発展研究所の提案の中には、ロシア連邦保安局の解体や西側従属的外交政策の採用が含まれている。メドベージェフ大統領は今年5月に彼らの提案に従うかのように、2期目において政党登録要件の緩和や知事公選制等の大規模な改革を行う意思を示した。また、外交政策に関してはリビアと西側諸国とを仲介しようとした。

アドバイザー達は、メドベージェフ氏にプーチンのシステムに対するボリス・エリツィン型の破壊者の役割を演じさせようとしているのだが、メドベージェフ氏が必要としているのは、実は中国共産党のような漸進的な近代化推進者としての役割である。5月の記者会見でメドベージェフはそのことに気づいたことが明らかにしたのだが、時は既に遅く、プーチン氏はもはやメドベージェフ氏を信頼してはいない。

メドベージェフ氏のアドバイザー達が、9月のヤルスロヴリ、グローバル政策フォーラムにおいて、メドベージェフ氏が公然とプーチン氏に反旗を翻し、大統領選出馬を表明すべきだと主張しているのはメドベージェフ陣営の絶望のサインに他ならない。それは先手を打ってプーチン氏を阻止するとともに、メドベージェフ氏を後継者として認めざるか、あるいはなぜメドベージェフ氏が自分の期待に沿わないのかを公衆の前で言明してメドベージェフ次期大統領として相応しくないと否定するかのいずれかを行わざるを得ない状況にプーチン氏を追い込む戦略である。しかしプーチン氏がメドベージェフ氏に挑戦することはないだろう。そうなるとエリート間の全面戦争につながるリスクがあるからだ。

この戦略が機能しない場合、メドベージェフ氏はヘイルメアリーのパス³として、選挙6ヶ月前までにプーチン首相を解任する可能性が無いとは言えない。だが、そのような、自分をまるでエリツィンやウクライナのユーシェンコ前大統領にしてしまうような利己的アドバイスを無視する賢明さは、メドベージェフ氏は持ち合わせているだろう。彼が為すべきことは、自分の能力を近代化アジェンダ推進に別の形で使うという正しい政治的役割を見出すことに集中することである。そうすれば彼が政治の舞台の中心に復帰し、2018年か2024年に大統領選候補者となる可能性も生まれてくるだろう。

² 現代発展研究所が2011年3月に公表した「未来の実現：2012年戦略」《Обретение Будущего Стратегия2012》

³ アメリカン・フットボールの試合終盤で、負けているチームが最後の賭けで得点を狙うために投げるロングパスのこと。

2. チャールズ・グラント「誰がロシア大統領になろうと関係ない」

Charles Grant "It doesn't matter who is president of Russia" Financial Times 1/8/2011

(1) 解説

チャールズ・グラント氏⁴はシンクタンク、ヨーロッパ改革センター (Center European Reform) 理事長。

同氏は、誰がロシアの次期大統領になろうとも、プーチン氏が実質的な支配者である状況に変化はなく、政治的民主化、法の支配の強化、資源依存経済からの脱却といったいわゆる「近代化アジェンダ」が急速に進む可能性は低いと見ている。今後ロシアは財政的困難に陥り、経済政策がリベラル派とナショナリストの妥協の産物として形成されていくことには変わりがない。

外交政策の大枠に変化はないが、欧米首脳と一定の信頼関係を築いていたメドベージェフ大統領が不在となると米ロ関係は従来難しいものとなり、対米関係の「リセット」の見直しや、リビア問題を巡る対立が生じることが予想されるとしている。

(2) 要旨

モスクワの人々は、次のロシア大統領が誰かという憶測には飽き飽きしている。メドベージェフ大統領は再選意思を明らかにしているが、ほとんどの人はウラジミール・プーチン氏が3月の大統領選挙の正式な候補者となり勝利すると考えている。

しかし、メドベージェフ大統領が続投しようがプーチン氏が復帰しようが、あるいは別の第三者が次期大統領になろうと大きな違いがあるだろうか。その間に対する短い答えは「ノー」である。経済、外交政策に対するメドベージェフ大統領の影響力は小さく、誰もが実際の決定権者が誰なのかを知っている。つまり、大統領選後にプーチン氏がいかなるポストに就こうとも、彼が支配的人物であり続けるのだ。

次期大統領はより多元的政治システムを許容することはなく、法の支配を強化したり汚職撲滅に取り組んだりすることもないだろう。次期大統領がロシア経済を資源依存から脱却させることも、製造業やサービス業の役割が高めることもないだろう。そのような政策はロシアの支配階層の権力基盤と富を脅かすことになるからだ。

次期大統領は財政危機に直面するだろう。増大する財政支出は、原油価格が1バレル115ドルの水準にないと賄うことはできない。5年前の原油価格は30ドルだった。来年は125ドル程度だろう。メドベージェフ氏の支持者達は、メドベージェフが再選されれば経済近代化が進むと言う。例えばプーチン氏よりも民営化を熱心に進めると言う。しかし、メドベージェフ大統領は過去3年あまりの間にほんの僅かしか達成できなかった。結局のところ閣内の2人の経済的リベラル派—ドリン財務大臣、シュヴァロフ第一副首相は2人ともプーチン派の人物だからである。

⁴ http://www.cer.org.uk/about_new/about_cerpersonnel_grant_09.html

誰が次期大統領となろうとも、経済政策はリベラル派とナショナリストの妥協によって形成される状況に変わりはない。

外交政策においても劇的な変化はあり得ない。統一ロシア幹部の一人は「外交政策はプーチンがクレムリンを離れても大きく変わらなかった。だから戻ったとしても変わるだろうか？」と語っている。近年の外交政策上の最も重要な進歩は対米関係の「リセット」であったが、これも従来通りには維持できないだろう。「リセット」自体がそもそも打算に基づくものであった。ロシア人は米国がウクライナを含む近隣諸国におけるロシアの優位を受け入れたと思っている。そして米国はロシアにアフガンへの物資補給ための通過とイラン制裁に協力させた。

外交政策の大枠に変化がないとしても、メドベージェフ氏が大統領でなくなると細部に変化生じる可能性もある。メドベージェフ大統領が国連安全保障理事会のリビア制裁決議に拒否権行使ではなく棄権を選択したことはロシア国内で全く支持されていない。さらに、メドベージェフ氏はロシアの WTO 加盟を進めようとしてきたが、プーチン氏は自動車輸入関税を引き上げることでその障壁を高めている。

バラク・オバマ、アンゲラ・メルケル、ニコラス・サルコジはメドベージェフ氏と強い関係を結んでいるが、プーチン氏との間にそのような関係は無い。オバマとメドベージェフは新しい STRAT の交渉を進め、核兵器削減の新しい条約を締結した。一方、プーチン氏の外交姿勢はより対決的で、彼は国際関係をゼロサム的観点から見ている。

例えメドベージェフが大統領に留まっても、米ロ関係の「リセット」は困難に陥るだろう。ある米国高官は「既に果実は摘み取られた」と言っている。ロシア国内の強硬派は、オバマの対ロ柔軟姿勢に批判的な多くの共和党議員のように、リセットを決して好ましく思っていない。

オバマ大統領のミサイル防衛計画もまた、ロシア人を怒らせるだろう。2020 年に開始される最終段階において、米国は大陸間弾道弾撃墜用迎撃機を配備する予定となっている。ロシア軍上層部はそのようなシステムはロシアの核戦力を無力化させると危惧している。ロシア軍は米国の計画を、軍備費増額を正当化するために使っている。2010 年から 2013 年の間に実に 60% も増加する見込みである。

リビア問題も反目の種となる。NATO の軍事作戦は国連決議の条件を超えており、ロシアには相談がなかった。その結果メドベージェフ大統領は西側諸国のリビアに対する対応に批判的である。ロシアは主張を通すためにはリビアに関するあらゆる国連決議に拒否権を行使するだろう。

メドベージェフ氏はロシアを変えることができなかった。だが、西側とロシアのエリートとの間でクッションの役割は果たした。彼がいなくなったら、多くの摩擦が起きるかもしれない。と

にかく、米国と欧州諸国は、益々経済的に困難に陥っていくロシアが、さらに敵対的になることに備えなくてはならない。米国と欧州諸国はロシアの経済的近代化を支援するためにできることは行うべきだが、それもロシアに大きな影響力を与えることはできないだろう。誰が大統領になると、対口関係は簡単ではないだろう。

3. コメント

これまでのタンデムの動きから勘案すると、今回紹介した2氏が主張するように、メドベージェフ氏がプーチン氏と大統領選挙を戦い、勝利して唯一の権力の中心として近代化アジェンダ・民主化改革に邁進するという2012年後のロシアの姿は予想しにくいものとなっているのは確かであろう。

現代発展研究所のユルゲンス所長とゴントマヘル理事による論文「メドベージェフよ、今こそルビコンを渡れ」については既に報告のとおりであるが⁵、メドベージェフ大統領に対し今すぐに立候補宣言を行うことを求める彼らの主張を、メドベージェフ陣営の「絶望のサイン」の1つと見るフローロフ氏の見方にはやや驚かされるが、やはり状況はかなり厳しいものがあることが伺われる。

以上

⁵ ロシア関連メモ No.77 「ロシア 2012 年問題(3)『メドベージェフよ、今こそルビコンを渡れ』(2011.8.5) 参照 http://www.cipps.org/group/russia_memo/077_110805.pdf